

藤沢周平

風の果て

下



風の果て
下

藤沢周平

朝日新聞社

風の果て 下巻

定価 一〇〇〇円

一九八五年一月三十日第一刷発行

著者 藤沢周平

発行者 初山有恒

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五―三―二

電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京〇―一七三〇

©Shuhei Fujisawa 1985

ISBN4-02-255315-4

Printed in Japan

下
卷
目
次

天空の 声	陰の 図面	政 変	町 見家
212	119	82	7

装画 東啓三郎
装幀 多田進

風の果て

下巻

町見家

一

雨さえ降らなければ、又左衛門は一日のうちに何度かは庭に出る。

何年か前に、郡代から中老にすすんでいまの屋敷をあたえられたとき、又左衛門がもっとも喜んだのは屋敷にひろい庭がついていたことだった。しかもごてごてと木や石で飾ったりせずに、あっさりした築山のうしろに、素朴な雑木林を残してあるところが気に入った。文字どおりの雑木林で、そこには小楡や栗、えごの木、辛夷シラカバなどがあり、櫟の木までまじっていた。

雑木林は、四季の変化を敏感に映すだけでなく、晴天の日、雨の日、風の日と、それぞれに微妙な風情をみせる。むろん、絶えず小鳥がおとずれて、季節によっては騒々しいほどにさえずり合うのである。

長い間郷方回りの役人を勤めた又左衛門には、村の百姓なみにその日の天候を気遣う習性が身についていた。朝起きて顔を洗ってから縁側に立ち、雑木林とその上にひろがる空の色からその

日の天候を占う一刻が、又左衛門のひとに打ち明けたことのしないたのしみになっている。

いまは雑木林は、あらまし葉を落としてしまっていた。歩いて行くと、足もとにかさかさ落ち葉が鳴った。又左衛門は立ちどまって上を見上げた。赤茶けた小楢の葉が、あちこちの枝にかたまつてしがみついているほかは、木々の枝はほとんど裸で、青い空に網目のような細い枝先をひろげている。

その枝の隙間に、網にかかった魚のように浮かんている白い月が見えた。位置からみて、日が暮れば一刻も経たずに隠れる月であろう。又左衛門は、月を仰いでいるうちに昨夜の舟の上の斬り合いと、陸に上がったときの町の暗さを思い出した。

だが、昨夜の出来事は、さほどに又左衛門の胸に衝撃を残しているわけではなかった。事前に組頭の堀田から耳打ちされていて、そういうことがあるかも知れないと、気持ちの中で待ちかまえていたせいもあるだろう。過ぎてしまえば、おどろきは少なかった。又左衛門は藤蔵に他言を禁じたので、二人がそんな危ない目にあつたなどとは家の者も知らない。

——おどろいたといえば……。

あのときの方がよほどびっくりしたのだ、と又左衛門は、考えがどうしても若いころにあった銀橋の上の斬り合いと、そのときに見た野瀬市之丞のことに流れて行くのを感じる。

そのころまだ隼太といつていた又左衛門と、用人の牧原喜左衛門を襲つて来たのは、小黒派の男たちと後で判明した。五人の襲撃者の中から即死二人が出て、隠しようがなくなったのであ

る。

形から言えば、又左衛門はあの夜、あきらかに市之丞に救われたのだった。五人に襲われて市之丞が現われなかったら、牧原ともどもおそらく助からなかっただろう。

だが、又左衛門はそのあと市之丞をたずねることをしなかった。その夜の出来事には、たずねて行つて市之丞に礼を言うことを憚るようなものが含まれていたのである。

野瀬市之丞が、あの夜偶然に銀橋に來合させたなどということはあり得なかった。あきらかに、二重に牧原を護衛していたのである。だがそれは、又左衛門とはまた異なる理由から、ひとに言うことを憚る役目だったのだろう。だから、声をかけられるのを恐れるようにして立ち去つたのだ。忠兵衛が言つた、陰扶持という言葉がそこに浮かび上がって来る。

それも市之丞をたずねにくい理由のひとつだったが、又左衛門にはもうひとつのこだわりがあった。その夜の斬り合いで、市之丞が二人もの命を奪つたことである。しかし襲つて來た男たちは、ひと口に言えば蹴ちらせばいい相手だったのだ。それを情け容赦なく殺害したところに、市之丞の劍の腕を知っている又左衛門は、ひとを斬ることに狎れ親しんだ者の、一種荒んだ空氣を嗅ぎ取らずにいられなかったのである。

むこうが知らぬふりをするなら、こちらもそうした方がいいと、又左衛門は思った。しかし、そう思ったままつぎに市之丞と会うまで思いがけない長い月日が経つたのは、翌年からいまでは天明の凶作と言っている未曾有の不作がはじまつたせいだったろう。

「ただいまもどりました」

声がして、青木藤蔵が林の小道を又左衛門の方に近づいて来た。

「どうだった？」

「影も形も見えません」

と藤蔵は言った。藤蔵の顔には、朝から歩き回った疲れがうかんでいる。どことなく浮かない顔をしているのは、疲れだけでなく収穫がなかったせいもあるだろう。

「見つからんか」

「はあ、御城下にはおられないのではないかと思われます」

しかし藤蔵は、そこで気を取り直したように顔いろをひきしめた。

「もしおひまを頂けましたら、明日は八葉山まで行って来たいと存じますが……」

「海穂寺か」

「はい」

「やつめ、そこに案外もぐりこんでおるかも知れんな。行ってみるか」

と又左衛門は言った。

八葉山は、海に沿って北にのびる砂丘の根もとにある山で、高さはさほどでもないが懷が深く、古来真言宗の修験場として知られて来た。長い峰々と深い襞をきざむ谷間に十五の寺院が散在し、一山の寺院を統べる学頭が山麓の海穂寺だった。

市之丞が親戚の家のように出入りしていた城下の祈願所光明院は、海穩寺の末寺になっていて、住職の徳栄は海穩寺で修行した僧である。

そのあたりのことはもう調べてあるらしく、藤蔵は明日は市之丞をさがしに海穩寺まで行くと言っているのだった。ひょっとしたらと、又左衛門も思わぬでもなかったが、ひとつだけうなずきかねるのは、八葉山の麓まで城下からざっと四里の道のあることである。隠れ家として絶好だといっても、ただ果たし合いの日まで又左衛門を避けるという、それだけの理由で市之丞がはたして足まめにそこまで行くだろうか、と又左衛門は疑う。

「実家をのぞいてみたか」

「はい。下男の才助に事情を聞きましたが、ここ三月ばかり、野瀬さまのお顔を見ていないそうです」

「山崎の家と、片貝道場、それに……」

「播磨屋ですか。すべて回りましたが、立ち寄った形跡は皆目見当たりませんでした」

藤蔵は、又左衛門が挙げた、城下で市之丞を泊めて喰べさせておきそうな場所を、すべて否定した。

山崎というのは、十五年ほど前に市之丞が寺田一蔵の一件とは別に上意討ちの討手を命ぜられたときに組んだ相手で、以来昵懇（じつこん）のつき合いをしていると聞く馬廻りの山崎作之進のことで、また片貝道場を疑うのは、市之丞と道場の長いつながりを知っているからである。

道場は、道場主の片貝十左衛門が老齡を理由に隠居したあと、十左衛門には血縁がないので羽賀吉十郎が跡をついだ。その道場と、市之丞はずっとつながりを持ち、平井甚五郎、中根又市といった高弟たちの足が遠のいたあとは、羽賀を助けてしばらく師範代格で若い門弟に稽古をつけていたこともある。

もっとも、あるとき中根又市から聞いた話によると、市之丞が道場に入入りするのは陰扶持を隠すための擬態で、そもそも陰扶持というそのものが、師匠の十左衛門の斡旋によるものだとも言う。その話が真実なら、道場と市之丞は切っても切れない縁につながれているのである。

片貝十左衛門はもう七十を過ぎたが、まだ健在で、市之丞はいまも時おり道場に顔を出しているはずだった。数日身を隠しているのに何の支障もない場所である。

播磨屋と市之丞のつき合いの詳細は知らない。ただ又左衛門は、城下でも指折りの呉服屋である播磨屋が、市之丞がたずねると異様なほどに丁寧に待遇し、時には黙って三日ぐらいは泊めることを伝聞しているだけである。

「そうか。するとあとは、藤井庄六の家ぐらいかな」

と言って、又左衛門はにが笑いした。庄六はかくまえと言われればあるいは市之丞をかくまうかも知れないが、その家には行って来たばかりである。それに庄六の家は、ひとをかくまうには狭すぎるだろう。

「やはり、海穩寺まで行って来るか」

「はい、きしつかえなければ……」

「明日は二、三客が来るだけで、外に出る用はない」

と又左衛門は言った。

もどって行く藤蔵を、ちょっと見送ってから、又左衛門はまた道というほどのものもない林の中を歩き出した。

——姿を隠しているのは……。

まだ脈があるということだ、と又左衛門は思った。つかまえて話しこめば、市之丞は話のわからぬ男ではない。また、話を通じないほど冷え切った仲でもない。そのことを自分でも知っているから、市之丞は逃げ回っているのだろう。

又左衛門は雑木林の梢を仰いだ。枝にあたっている日射しが、いくらかさっきより濃くなっている。日が沈むところらしかった。そのとき、又左衛門の頭に、ぽっかりと浮かび上がって来たものがあつた。

市之丞がいるかも知れない場所で、一カ所だけ記憶から抜け落ちていたところがある。又左衛門は藤蔵を振りむいたが、藤蔵はもう林を出て、庭を横切っているところだった。呼びとめようとして、又左衛門はやめた。

——いや、あそこは……。

おれが直接に行った方がいい、と又左衛門は考え直した。市之丞をたずねて、たった一度隠れ

家のようなその家に行ったときのことを思い出している。それは、又左衛門が代官になった翌年のことだったのだ。

そこに住んでいるらしいと、市之丞の実家で聞いて来た餌刺町は、ごみごみした職人町だった。桶屋、指物師、漆塗り細工、表具師などの家がならび、町には木の香や砥の粉の匂いが漂っていた。この道を通り抜けると、日蔭町に出るらしいと見当がつかけて来たころに、目印の町角の庚申塔が見えた。

聞いたとおりおとなにそこを曲がると、町は急に裏通りめいたひっそりした路地に変わり、槌の音や木の香も次第に遠のいた。そのあたりにあるのは、ほとんどがしもた屋だった。

からからと、よく鳴る格子戸をあけると、玄関まで小砂利を敷きつめた路がある小粋な住まいだったが、その家は日も射さず、陰気なほどに静かだった。はたして中に市之丞がいるのかどうかと危ぶみながら、隼太は玄関の戸をあけて訪いおとなをいれた。だが、家の中は森閑としている。

二度、三度と声をかけると、ようやく奥の方で女の声がした。声の主が出て来るまで隼太はまたしばらく待たされた。そして軽い足音がしてその女が姿を見せたとき、隼太は一瞬、家を間違えたのではないかと思った。はげしい狼狽に襲われ、思わず背をむけてその家をとび出そうかと思つたほどである。女は宮坂の後家だった。もっとも宮坂の家は、一蔵の脱藩の始末がついたあとで、取り潰しになっている。